

プロローグ

私たちは、初めて会ったときから互いを意識し合っていた。

ロシアからやって来て、アメリカのバレエを変えた偉大な振付家、ジョージ・バランシンのことを、私は子供のころから知っていた。幼少期に通ったダンスクラスの先生たちは、彼は神様のような人、生きた伝説なのだと話してくれた。だからこそ、ニューヨークにあるその神様のバレエ学校のスカウトがケープコッドにやってきて、私のクラスで特別レッスンを行い、奨学生のオーデイションを受けるよう私に勧めてくれたときには、天にも昇る心地だった。指定された日、父の運転する車で市内に向かうあいだも、ずっと興奮覚めやらぬ状態だった。

のちにジョージが話してくれたのだが、オーデイションでの私はすでに一人前のバレリーナーに見えたという。体が小さいのは、望遠鏡を逆さまにして覗いているからではないかと錯覚したそうだ。

十一歳の私は、オーデイション番号をシャツにピンでとめてもらい、競走馬になったような気分だった。ジョージの視線が私の動きのすべてを追っているのが嬉しくて、これ見よがしに大きな動作で嬉々として踊ってみせた。でも当時の私は、この巨匠に特別な感情は抱かなかつた。脂ぎ^{あぶら}って、前歯が出て、頬骨が尖っている、オジンだと思っていた。

彼は定期的には子供のクラスを持たず、突然現れては、威厳を示すかのように指を鳴らしながら私たちの前を行ったり来たりした。おどおどしてしまいう子もいたが、私は違った。右に動かなくてはな

らないのに、目立とうとして左に動いたりした。ある日、媚びを売るように踊っていたら、そんなわざとらしい、受け狙いの踊り方はうんざりだとバランシンに叱られ、部屋から追い出されてしまった。少しずつ、私はミスター・B——ダンサーたちは彼のことをそう呼んでいた——が言わんとしていることがわかってきた。ダンサーは踊りの中になくはならない。音楽に合わせて踊るだけではない。体のラインと足が打ち出すビートで、ダンサー自身が音楽を表現するのだ。

スタジオで彼が私に関心を示してくれるようになる、それまでは楽しいゲームだったバレエが、魅力あるものを感じられてきた。私はただ走るだけの競走馬ではなく、それを乗りこなす騎手でもあるのだ。踊りがいかに私たちをちっぽけな自分以上のものにしてくれるか、ということに彼が教えてくれたからこそ、私は懸命にその期待に応えようとした。

バレエは人々を異文化、異次元へと誘う。そして、生きて踊っている私たちが、過去と未来を繋ぐ役割を担うのだ。

バレエ学校を修了し、バレエ団に入ったものの、私はコールドバレエには配属されなかった。バラシンは新人の私を『シンフォニー・コンチェルトンテ』にキャストイングして、当時の妻でバレエ団の花形だったマリア・トールチーフと一緒に踊らせた。できないステップを百回繰り返して練習している私に、「タニイ、それだけのために自分をほろほろにしちゃだめよ、完全なんてありえないのだから」とマリアは忠告してくれた。でも私にはジョージが求めているものがわかっていたし、それに応えなくてはと心に決めていた。懸命に練習を続けていると、マリアはこうも言った。大抜擢されたダンサーが一度やる気を見せると、それがどんどんプレッシャーになっていくのだと。ストレスになる物言いだった。そのうちマリアは、あなたはバランシンと結婚するのね、お幸せに、というようなことを口にするようになった。

その頃の私は、犬の真似をして四本足で床を動き回ってはジョージを笑わせたりしていたが、彼はそんなおバカな私に魅せられていた。痩せて鋭角的な私の体に美を感じていた。なんとかしてこの虚弱體質を治そうともしてくれていた。都会的で洗練されたフランス人の血が流れているにもかかわらず、アメリカ人の愚鈍さも持ち合わせている私の性格を彼は気に入っていた。お嬢様然としてフランスのリセに通学し、クロスワードパズルはいつも一番なのに、パーティーでは友人で振付家のジェリー・ロビンズと口論した挙句、数人の水兵を引き連れ夜の街に出て行ってしまふ——私にはそんなところがあつた。酔っぱらって戻ってきて、吐きそうだと云つたときには、ジョージのくすくす笑いが止まらなかつた。

年齢は離れていたけれど、実際のところ彼はそんなに年寄というわけではなかつた。彼が口にする言葉が私は好きだつた。組んで踊る練習のときに彼の体が私に触れる感覚が好きだつた。マリアはジョージからプロポーズされたとき、私はあなたを愛しているかわからないわ、と応えたが、彼の返事がふるつていて、愛はそのうちやってきます、というものだらう。マリアの女友達は、結婚したら彼は尽くすタイプよ、と確約したが、実際そのとおりだつた。二人は一緒に仕事をし、家では仲良くピアノの連弾をした。私ときたらマリアと違ってピアノの鍵盤のどこが中央のハの音なのかさえわからない。でも、情熱に関してはどうだらう？ マリアは虎で、タニイは花——ジョージはある人にこう私たちのことを説明したことがある。それが二人の体のことだつたら当たつている。マリアは小柄で浅黒い。私は色白で、ひよろつとした体形をしている。でも氣質でいうと、ジョージと恋に落ちた私は機関車そのものだつた。

私がバランシンに魅力を感じるのには、彼がダンスのために成し遂げたことと無関係ではない。バランシンは、二十世紀に古典バレエを甦らせた。古い表現形式に現代的解釈を与え、第二次世界大戦の

戦勝国の精神にふさわしい、生き生きとした先進的な芸術に作り替えた。古臭さを捨て去り、アメリカ的でコスモポリタンのでもある様式を吹き込んだ。

一九四〇年代から一九五〇年代当時、バレエ鑑賞は贅沢なことではなく、あらゆる階層の人たちがバランシン作品を観たがった。初期のニューヨーク・シティ・バレエの公演では、観客の熱狂で劇場の屋根が吹き飛んでしまいそうな夜もあった。

バランシンは観客を喜ばせるために高度なテクニクを取り入れ、自分が狙っているものを体現することのできる優れたダンサーを求めた。バレエにジャズや大衆的なダンス・スタイル、さらに運動的要素も取り入れることで、踊りに説得力、滑稽さ、セクシーさをもたらした。

バランシンの体から動きが溢れ出た。振付の最中、ダンサーにとってそのステップが難しいと判断すると、その場で即座に違う振りを考え出した。踊るのを見なくても、バランシンはダンサーの力量を見抜いた。そしてダンサーを信頼した。バランシンから信頼されるのは嬉しい、彼はやる気を与えてくれる、だからダンサーとしても彼の期待を裏切ることにはできない。バレエマスタは厳しくて怖いものと思われている。確かにバランシンには緊張させられ、要求度が高かったが、彼はダンサーを育てようとしていたし、楽しい人でもあった。常にダンスのことを考え、ダンスに関するすべてに対して子供のような情熱を最後まで持ち続けていた。だからこそ、ダンサーたちはミスター・Bに我が身を捧げてきた。バランシンは「君たちはこの作品のなかで僕と一緒に在るのです」と語りかけていたのだと思う。ダンスを創る作業は相互依存なのだ。バランシンはダンサーの若い肉体を必要とし、ダンサーは彼の才能を必要としていた。

バランシンへの愛がいつのまに私のなかで広がっていったのかわからない。私たちは仕事、つまりダンスという芸術で結ばれていて、互いの絆と親密さはその上に成り立っていた。バランシンはありき

たりの男性ではない。彼が私に求めていたものは。私が自分に求めていたものと同じだった。

外見的にはバランシンは普通の男、というのが定評だった。トレンチコート姿の彼を近所で見かけたという人に言わせると、「これといった特徴のない風貌」ということになる。私はそうは思わない。背は高いほうではないが、若いときにはもっときりっとした顔立ちだった。少しアジア的で、まっすぐな黒髪、茶色がかった黒い目をしていて。写真に凝っていたころ、私は見たままの彼をフィルムに収めようと苦心した。笑ったり、物思いにふけったり、厳しい顔をしていたり、表情はさまざまだが、全部バランシンだ。肌の血色が悪い。それがわかる写真もある。ロシアで暮らした十代のころ、飢えや寒さに苛まれていたからなのだ。

一九五〇年、あの大空襲の爪痕が残るロンドンでの公演中、ジョージが不在だったので、私とマリヤ・トールチーフでホテルの部屋をシェアしたことがある。そのときマリヤが、好きな男性がいて、独り身になることを考えていると打ち明けた。翌朝、私は瓦礫と板張りの窓だらけの町を飛ぶように走り抜けて稽古場に向かった。ジョージが自分のものになる。心がはやった。私は二十一歳だった。

初めての夜、彼はずっと微笑んだまま、私の肩から胸、腰、そして脚からつま先にかけてゆっくりにじっくり眺めていた。時間をかけた身体検査のあいだ、私は体をもそもぞさせ、彼の肘に噛みつく真似をした。その瞬間、心臓がとまるかと思うほどの強さで彼に捕まれ、抱き上げられ、体をひっくり返されたので、頭がベッドのお尻の方を向いていた。キスをしながら、飽きることなく私の体を眺めまわし、彼は微笑んでいた。

一九五二年十二月三十一日、私たちは結婚した。彼四十八歳、私二十三歳。夕飯時になると、夫の友人たちがやって来て、精力旺盛な中年ロシア人よろしく大きな身振り手振りで止めどなくお喋りする姿を横目に、私は母に耳打ちした。「私ったら、こういうことに首を突っ込んでしまったわけ？」そ

して二人で大笑いした。笑い過ぎて私は真珠の首飾りを引きちぎってばらばらにするところだった。冗談でそう言っただけで、私はジョージを尊敬し愛していた。私とジョージは彼の元妻たちとのようにはならない。私はそう確信していた。内縁の妻だったアレクサンドラ・ダニロワも含めると、私は彼の五番目の妻になる。ジョージはダニロワを二番目の妻として認識していたし、私もそのように受け止めていた。

結婚式が済むと、私たちは東七十五丁目のエレベーターのないアパートに移り住んだ。夜明けとともに、キモノを羽織ったジョージが、私のカップにブラックコーヒーを淹れて、起こしてくれるのが日課になった。

それからレッスンに行き、次にリハーサル、衣装合わせ、そして本番。朝から晩まで時間との競争なのだ。

結婚したばかりのころ、彼は私のために『ラ・ヴァルス』と『変容』を振付け、ラジオに出演したとき、世界中に向ってこう宣言した。「僕は彼女を愛しています。いとしい彼女に伝えたい。君は僕の人生を素晴らしいものにしてきている。だから君のために作品を作りたいのです」

新しい役が次々と与えられた。私はテレビでも踊り、ファッション誌にも登場した。モデルになった私にジョージは胸躍らせた。「ヴォーグやタウン&カントリ誌がタナキルを必要としています。彼女には華があります。微笑むとまるでヴィヴィアン・リー。小さな女の子、可愛い子猫ちゃんにもなります。たくさんのお色を持っています。僕みたいです。タナキルこそ真のミセス・バランシンです」

私は彼を通してイーゴリ・ストラヴィンスキー、レナード・バーンスタイン、テネシー・ウィリアムズ、ゴア・ヴィダールたちと知り合いになり、著名な詩人や画家たちとも友だちになった。

そうこうするうち初めて白鳥を踊ることになった私は、いつになく不安で、泣きだしてしまった。

涙が止まらないまま、文字通り舞台上に押し出され、なんとか踊り終えたものの、びくびくした情けない踊りだった。以前マリアが話してくれた、恐ろしいプレッシャーの渦に巻き込まれてしまったのだ。

ジョージは、「明日はもつと上手くできますよ」とだけ言った。彼は正しかった。翌日、私の踊りはニューヨークタイムズで激賞された。舞踊批評家のジョン・マーティンが、「昨日の彼女はただのダンサーだったが、今日はバレリーナーだった」と書いてくれたのだ。

しかし、バレエ団と私の仕事がうまく行けば行くほど、私たち夫婦の時間がなくなってきた。自分の生活がない、と私は感じ始めていた。でもそれは間違いだだった。いまの生活こそ私が求めていたものだったのだ。それにしてもあまりにも過酷だった。

新婚はやほやのころ、私に一番がない夜は、よく二人でタイムズスクエアの映画館に出かけて二本立てを観たものだ。いつもタバコが吸えるバルコニー席に陣取った。二人とも映画が好きだったし、私は片方の脚をジョージの脚に寄せて、「こら、やめなさい！」と言われるまで彼のズボンの裾を足でずり上げていくのを楽しんだ。

私は若かった。活力に満ちていた。踊りたいのはもちろんだが、深夜まで街で遊んでいたかったし、夜明けまでセックスをしていたかった。そんなことはバレリーナーには禁物だ。ジョージがいかに踊りを愛しているかということに、私は気付いていなかった。一九五六年、私たちの生活にひびが入り始めていた。結婚して三年が経っていた。

元妻たちについてジョージはこう語ったことがある。「みんな、僕を捨てたのです」私は言い返した。「あら、自分が出て行ったくせに」これで彼はいっそう冷たくなった。バランスンには、どこにも行かないで、と言わなくてはならない。それは、彼が好きな西部劇映画のカウボーイたちが地面に

引く境界線のようにはっきりしている。

その後も結婚は十三年続いた。一九五六年のツアーのときには、そんなに二人が長持ちするとは思ひもしなかった。再婚して妊娠していたマリアがチユーリツヒでツアーから降りてしまった。ジョージは彼女の役をほかのプリンシパルたちに割り振ったが、ほとんどが私に充てられた。自分の分に加えてマリアの分も踊るのだから、疲労たるもの半端ではなかったのだ。

一九五六年のツアーは私という人間を永遠に変えてしまった。あの出来事のために、それまでの私に取って代わる「もうひとりの私」が後世に残ることになった。人々は私のことをもはやバレリーナーとしてはとらえていない。「もうひとりの私」の物語が、これまで私が成し遂げてきたことに暗い影を投げかけている。

それについては知られていないことが数多く存在する。そのほとんどがジョージに関係していることばかりなのだ。「もしも」という接統詞で始まる話ばかりだが――

もしも私があんなに激しく踊っていなかったら、もしもあんなに多くの役を充てられていなかったら、もしもツアーをしていなかったら、もしもあの年に母がツアーに同行していなかったら、いやそれより、もしもあのときジョージが私を落ち込ませず、私も彼を失望させていなかったなら。

一度、ジョージにそんな「もしも」話をしたことがある。なんということか、私はそのとき頭のかなで空想して彼に対して憤っていたのだ。

ジョージは平然として私を見つめ、年取った看護師が語ってくれたという話をした。「もしもキノコがああなたの口のなかに生えたら、あなたの口は口じゃなく、家庭菜園です」

「もしも」であれこれ考えるのは馬鹿げたことだとジョージは言おうとしたのだ。しかし、それでも、私のなかには疑念が残った。